苺ジャム畑

と〜る

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
苺ジャム畑

【Ｎコード】
Ｎ６１６７Ｌ

【作者名】
と～る

【あらすじ】
ある日、僕は懐かしい匂いを感じながら不思議な畑で目を覚ました。そこは苺ジャム畑…。
恋人と別れ、退職して行く当てのない僕はジャムを育てる不思議な生活を始め、様々な出会いをしていく。寡黙な男、気のいい中年女性、病気がちな少年に、年を感じさせない老人。今の出来事と過去の記憶から僕は、少しずつ人生の階段を上っていくのだ。

1

去年まで付き合っていた彼女は大の甘党だった。
僕は彼女のためにいつも部屋にジャムを用意して、彼女はそれを毎朝トーストに塗って食べていた。その塗る量がとても多く、一回に瓶の半分を使い切ってしまう程だった。そして、口の周りにジャムを付けながら「おいしい」と笑顔で言うのだ。
「人の畑で何してるんだ？」
そう男に起こされた時、一番最初に思い出したのはその彼女の笑顔だった。彼女と最後に過ごしたあの日と同じように、アルコール臭い自分の体臭と甘いジャムの匂いが混じって感じられたからかも知れない。
やはりあの日の前日も、記憶がなくなるほどお酒を飲み続けていた気がする。今もそうだ。昨夜、銀座から六本木のお店に移って同僚と飲んでいたのまではハッキリと記憶にある。その後、同じお店にいた女の子と意気投合して、なぜかＴＨＥ　ＹＥＬＬＯＷ　ＭＯＮＫＥＹのＪＡＭを二人して熱唱していた気がするが、正直それが現実だったのか夢だったのか定かではない。確かなのは、同僚に「始発時間だぞ」と言われ、あわてて電車に乗った事だ。何線に乗ったのかまでは記憶にないが、たぶん日比谷線だったと思う。日比谷線で帰るのが一番時間のかからない経路のはずだからだ。ただ、降りた駅は見知らぬ、名前も知らない駅だった。そこからどうやってここまで来たのか分からないが、次に気付いた時は甘い匂いを感じながら、しゃがれた男の声に起こされた瞬間だった。
「人の畑で何してるんだ？」
特に咎めるわけでも、驚いているわけでもない口調で男は僕に聞いてきた。太陽を背にしているので男の顔はハッキリと見えなかったが、そのしゃがれた声から年齢を感じることができる。
「たぶん…、寝てたんだと思います」

降り注ぐ太陽の眩しい光に目を細めながら、未だにハッキリしない頭をフル回転させて答えた。しかし、どんなに頭を回転させても思い出せるのは電車から見知らぬホームに降りたところまでで、どうやってここにたどり着いたのか思い出せない。ただ、寝ていたことは間違いないようだった。枕代わりに使っていた袖に、しっかりと涎が付いている。

「ここは、どこです？」

上半身を起こすと頭に鈍い痛みが走った。慌てて手で確認してみるが、特に傷や腫れがあるわけではなく、ただの二日酔いの痛みだと分かる。相当量を飲んだに違いない。体から染みでる汗でさえ、アルコールの匂いを含んでいた。いや、もっと不快なのはその汗をふんだんに吸い込んだ服の方だ。雨の中を走って来たかのようにビッショリと濡れている。考えて見れば、サンサンと輝く太陽の下で寝ていたのだ、汗をかかない方がおかしい。むしろ、これだけ眩しい太陽の光を浴びながらも眠り続けていた自分に驚きかもしれない。すでに太陽は真上まで上っていた。

帽子か日傘が欲しいと思ってしまうほど強い日差しを、なんとか手で目に入らないようにしながら周りを確認してみる。未だに上半身しか起こしていない自分よりも少し背の高い植物が僕らを囲んでいた。その植物には見たこともない大きな赤い実がなっている。どうやら、先ほど目を覚ます時に感じた甘い匂いはこの実から香っているようだった。

「立てるか？」

男が手を差し出して来てくれたので、その手を借りながらようやく立ち上がる。

「ありがとうございます」

お礼を言いながら、改めて男の顔を確認した。麦藁帽子の下にある顔は、年齢を感じさせる深い皺が刻まれていたが、その目にはしっかりとした活気がみなぎっていた。しかし、何となく浮き世離れしている感じもする。それは、彼に表情と呼べるモノがなかったか

らかもしれない。
「あ…えっと…」
まだ頭が完全にクリアになっていなかったが、帰巣本能だけは働いているようだ。どうやって帰るかを知らず知らずのうちに考え始める。そして、男がまだ先ほどの質問、ここがどこであるかを答えてくれていないことに気付いた。
「えっと…、ここはどこですか？」
立ち上がって見ると、見渡す限りこの甘い香りをまとった赤い実の畑が広がり、ビルなどの建物が視界に入ってこなかった。たぶん、相当田舎に来たんだろう。ただ、太陽がほぼ真上にあることを考えれば今は１２時前後。始発の電車に乗ったのだから、今から帰れないほど遠くへは行っていないはずだ。
Ｓｕｉｃａが使える範囲ならばいいんだけど…。
思わずそう思ってしまう。
「ここか…」
僕の質問に、男はどういう訳だか答えるのを躊躇した。それはここがどこか彼が分からないというよりも、どう伝えれば理解してもらえるのかを悩んでいるのに近い。
「ここはな…」
何故か彼が口を動かすのがゆっくりに見え、二日酔いの頭でも彼の言っていることがハッキリと聞き取れた。
「ここは、苺ジャム畑だ」
そう、あの日…、彼女がトーストに塗っていたのも苺ジャムだった。そして、彼女が半分だけ残したジャムが今も瓶に残っている。

2

「ここは、苺ジャム畑だ」

そう男が言うとおり、確かにここは畑だった。

荷車が通れる程の幅を持った道の両側に、赤い実を付けた低木が等間隔に植えられている。木は僅かな間隔を挟んで二列になって植えられていた。畑全体を見た訳ではないが、荷車が通る道 ↓ 赤い実の木が植えられたところ ↓ 僅かな間隔 ↓ 赤い実の木が植えられたところ ↓ また荷車が通る道 ↓ 赤い実の木が植えられたところ…、と言った感じで順々になっているのだと思う。僕はその赤い実の木と木の間にある僅かな隙間で寝ていたようだ。木が植えられている土の上には、保湿と雑草の発生を防ぐ為に藁が敷かれ、風で飛ばされないようにと麻紐が網の目状に張り巡らされていた。太陽の光を浴びた藁はとても寝心地がよかった。ただ、木は人の背丈よりも低いので、荷車を引いて畑を回っていた男からはハッキリと寝ている僕の姿が見えたに違いなかった。

そう、ここは畑だ。けっして工場ではない。

でも男は確かに「苺ジャム」と言った。

実際に、彼の荷車には赤い実が収穫されて積まれているのではなく、ジャムの瓶がケースに入って積まれているのだ。瓶にラベルも何も張っていなかったが、そのすべてに赤いジャムが入っている。蓋はしないでラップで口が塞がれていて、不思議なことに中身のない瓶は一つもなかった。

「この赤い実を使ってジャムを作ってらっしゃるんですね？　この木は苺じゃないですよね？　確かに匂いは苺ですけど、苺は木じゃなくって、草になりますものね」

僕は荷車に積まれているジャムの瓶を見ながら男に聞いた。苺ジャムの畑があるとも信じられなかったし、栃木へ彼女と苺狩りした時に苺がどんな風になっているか見て知っている。だから男が酔っ

ぱらい相手に冗談を言っているんじゃないかと思ったのだ。
しかし彼は一切の感情がない声で、「これはジャムの木だ。苺じゃない」そう答えるだけだった。
「…ジャムの木なんて聞いたことがないですよ」
人の畑に勝手に入り込んでおいて随分と横柄な態度に思えたが、わざわざ小道具を用意してまで人を騙そうとしているのが許せなかったのだ。
ただ、心のどこかで彼が別に騙そうとしている訳ではない気もした。
今日という日に酔っ払いが畑に迷い込むのを予想していたり、たかだか酔っ払いを騙すために荷車にジャムの瓶を用意したりするとも思えなかったし、「ここは別に苺の畑があるんですよね？」と僕が聞きなおしたのに対して、「どうやって騙そう」と考えるのではなく、「どうすれば分かって貰えるのか」を考えている様子だったのが、彼が一生のうちに一度も人を騙したことがないのではと僕に思わせた。
男はしばらく考えた後、一つの赤い実を枝から取った。その瞬間、苺の甘い匂いが僕の鼻孔に流れ込んでくる。確かに苺の匂いはこの実からしているようだ。彼はなんの躊躇もなく、まるで「自分で確かめろ」と言うようにその実を僕に差し出してくる。彼が持っている実はリンゴほどの大きさだった。ブルーベリーをそのまま大きくした様な見た目で、表面は光沢を持っていて磨かれた様に光を反射している。正直、いろいろなジャムを作ってきた僕も見たことがない実だった。
「…」
見たこともない実を受け取ったところで何が分かる訳でもないと思ったが、男が実を差し出しているので渋々受け取ることにした。
僕が手を出すと、男は黙って僕の手の中に実を置いた。
…重い！
実を受け取った瞬間、見た目以上の重さに腕が少し下がってしま

った。そこまでの重さではないとは思う。せいぜい水がいっぱいに入った５００ｍｌのペットボトル程度だろが、リンゴ程度の重さを想像して受け取ったので体が驚いてしまったのだ。
しかし、本当に驚いたのは重さではなかった。
堅い…のだ。
ブルーベリーの皮とは比べ物にならない堅さだった。いや、パイナップルやメロン、栗と比べても、この赤い実の堅さは群を抜いている。また、手触りも今まで触ってきたどの果物や木の実とも違っていた。ツルツルしており、正直、目隠しをされた状態で渡されても、これが木の実であることに気づけないと思う。
とても木の実とはとても思えない。これはまるで…。
「ガラ…ス…？」
僕がそう呟くと、男は僕の手から木の実を取り上げた。一瞬、彼が何をするつもりなのか分からなかった。ただ僕は、木の実のあり得ないその感触に驚き、彼が木の実を頭上へ持ち上げてそのまま地面に叩きつけるのを目で追うことしかできなかった。

ガシャン…

ガラスの割れる乾いた音だった。
間違っても、木の実が地面に叩きつけられて潰れる音ではない。
ガラスが割れる音だった。
「これは…、ジャムの木なんだ」
男の声を聞きながら、僕はもう一度荷車に積まれたジャムの瓶を見た。
収穫された、ジャムの瓶を…。

3

男の話には嘘があった。いや、嘘と言えるかどうか分からないほど些細なことだったし、男は決して僕を騙そうとしている訳ではなかった。

彼はここが「苺ジャム畑」と言ったが、実際にはジャムの木以外にも多くの作物を栽培していた。ソラマメやサヤエンドウにコマツナ、そしてネギ。

もちろん、彼は僕の「ここはどこですか？」という質問に対して「苺ジャム畑」と答えただけで、それは間違った答えでも嘘でもない。実際に僕が寝ていた場所は、広い農場のジャムの木畑だったわけだから。ただ、僕が聞きたかったのはこの畑が何処なのか、何というところなのかということだった。それに対する彼の返答が「苺ジャム畑」だったので、僕はここが「苺ジャム畑」という場所なんだと信じてしまったのだ。そういう観点から見れば、彼の言った事は嘘になる。しかしそれは、男が僕を騙そうとしているのではなく、あくまで日頃、人と接する機会が少ない為に会話をするのが不慣れなだけなのだと思えた。

きっとこの人は今まで一度も嘘なんてついていないんだろう。

ただ黙々と葱坊主を摘み取っている男の背中を見ながら僕は漠然とそう思うと同時に、今この瞬間が現実なんだと認めざるを得なかった。

正直、木にビンごとジャムがなるとは信じられない。しかし、地面に叩きつけられて割れた実を改めて調べてみると、確かにその欠片はガラスと同じだった。ガラスその物かどうかは分からないが、間違いなくガラスと同じような性質で、木の実の殻とは到底思えない堅さだった。他の木になっている実も確かめさせてもらったが、どの実もガラスの様に堅い殻を持っているのだ。

苺ジャムのなる木。

これは夢か？　それとも自分は不思議の国にでも迷い込んだんじゃないか？　僕は考えていた。
しかし葱坊主を摘み取る彼の、あまりにも現実的な行動を見ていると、これが幻ではなく現実なんだと分かってきた。少なくとも、夢ではないだろう。僕がこの畑で目を覚ました時、確かに頭痛を覚え、今でもわずかに痛みが残っているのだ。夢なら痛くは無いはずだ。
もちろん、本当のことを言えばジャムの木の実にも現実的なところがあった。
男と畑を一緒に周っていると、あのジャムの実に覆いがされているのを見つけたのだ。それは円筒型で白いプラスチックで作られていた。
僕はすぐに男に尋ねた。
男の答えは簡単だった。
木の実の形を矯正するのだそうだ。
ジャムの実はそのままでは完全な球体になる。球体のままではジャムとして利用するには不便で仕方がない。そこで、ビンの形になるようにある程度の大きさになったら白い覆いを被せて、形を矯正していくらしい。覆いの大きさにも様々あり、様々なサイズのビンを作ることができるようになっていた。
しかも、はずした覆いを見せてもらうと、ちょうどビンの底にあたるところに放射線状に溝が彫られているのが分かった。そう、滑り止めだ。
「買った人から苦情があってな。滑ってすぐ落ちてしまう…と」
だから自分で溝を掘り足したのだそうだ。
僕はその話を聞いて思わず笑ってしまった。
不思議なジャムの木と、クレームによる業務改善。
シュールなリアリティを感じずにはいられない。
もう一つ、苺ジャムに現実味を感じるところがある。それは、蓋が無いということだ。

木になるのはあくまでジャムの中身と、入れ物のビンだけらしい。木から実をもいでもビンには口がなく、のこぎりのような物を使って口を作るのだ。

「だから蓋はない。後から付けるんだ、ラベルも」

さすがにラベルも自然になる訳ではないようだ。

このジャムのラベルにはなんと書いてあるのだろう。「産地直送生！苺ジャム！！」というコピーを謳っているラベルを想像してみたが、普通にスーパーで見かけても決して、ジャムが木になっているのを想像することは出来ないだろう。本当に「産地直送」なのに、だ。

蓋もどのような蓋を使うのだろうか。荷車に乗っているジャムのビンには、蓋を付けるような溝は付いていない。普通のジャムに使われているような金物製の蓋ではなんとなくイメージと違う。薄いビニールか色紙を軽く乗せて、それを麻紐で縛ってある方がそれらしい気がする。

作業を続ける男の背中を見つめ、僕は勝手な想像に浸っていた。すると突然、女性の声が響いた。

「大島さん！　おおぉぉぉしまさんっ！」

なんとなく、この現実離れした状況のせいで自分と男しかいないと思っていたために僕は飛び上がるほどビックリしてしまった。

振り返ると、そこには中年の女性が立っていた。いたって普通の中年女性だ。

それを見て「やっぱりここは不思議の国ではないのだ。ただジャムがなる不思議な木があるだけなのだ」と改めて思った。

4

大島というのが男の名前だった。
女性がその名前を呼ぶまで、自分が彼の名前を聞いていなかった事に気付いていなかった。聞くのを忘れていたというよりも、このジャム畑の不思議な雰囲気に圧倒されてしまい、常識的な判断ができなくなっていたという方が正しい気がする。
「あぁぁ、伊東さん…」
男が女性の方を振り返りながら言った。
女性の方は伊東と言う名前らしい。大島に伊東…、どうやらここはまだしっかりと日本のようで、外国や不思議の世界に迷い込んでしまった訳ではなさそうだ。
「どうしたの大島さん？　いつもなら作業場でビンに蓋を付けている時間なのに？」
伊東と呼ばれた女性は腰に手を当てながら男…大島に文句を言った。手にはお財布が握られている。
「あぁぁ、ちょっと…」
男は申し訳なさそうにペコリと女性に頭を下げ、僕の方に目をやった。
たぶん彼には畑を回る決められた順序と時間があったのだろう。それが、僕が迷い込んでしまった為に予定が大幅に狂ってしまったに違いない。確かに、僕にジャムの木の説明をするのに多くの時間を使ってくれていた。勝手に畑に入っただけでなく、二人の予定を狂わせ、迷惑をかけてしまった事になる。僕は「申し訳ない」と思い、二人に謝ろうとした。
しかし…、
「この子が昨日言っていた、畑仕事を手伝ってくれる新しいアルバイトの子？」
僕が謝るより先に、女性が僕の事を見ながらそう言ってきたのだ。

突然の事に僕は謝るのを忘れ、ポカンと口を開けながら女性の顔を見つめてしまった。僕は土に汚れているとは言えスーツを着ていたし、緩めているとは言えネクタイをしている。どこからどうみても、サラリーマンにしか見えないはずだ。それを畑仕事を手伝いに来た人だと思うとは…。

「いや違う」

余りの事に僕が対処できずにいると、隣から男がそう言ってくれた。

「違うんだ。この人は」

「違うってどういうこと？　昨日、明日から新しい人が手伝いに来てくれるって言ってたじゃない？」

女性の言い方には急かすような雰囲気があった。

「今まで来てた人が急に辞めて、人手欲しかったんでしょ？」

「ああ、ただこの人は違うんだ」

男は手が土で汚れているのも気にせず、頭を掻きながらどう説明するかを考える。それを見て女性がイライラしているのが感じ取れた。たぶん、男はいつも同じようにゆったりと考えながら話すのだろう。どう説明すれば分かってもらえるのか、考えながら話すのだ。女性はそれが気に入らないようだった。

「じゃぁ、この人は何？　どうして作業場にいないの？」

やはり捲くし立てるように女性が聞く。

「すいません、ただ酔っ払って迷い込んだだけなんです」

なんとなく、男が責められている感じがして僕は慌てて謝った。

「だからその、アルバイトじゃないんです。ごめんなさい」そう言いながら深々と頭を下げた。

「あ、え？」

いきなり僕が頭を下げた為、今度は女性の方が慌てふためく番だった。

「そうなんだ。朝、ジャム畑を回っていたら寝てたんだ」

男が女性に説明をする。

「予定していたアルバイトは来ない。昨日の夜になって電話がかかってきた。今まで通り一人だ」
特に困った様子も無く男はそう言った。
「ふ～ん、そっか」
女性の方も特に驚く訳でもなく、淡々と答える。そして僕の方を見て、「んで、あなたは何処から来たの？」と聞いてくる。
「あ、六本木で朝まで飲んでたんですけど、酔っ払って帰りの電車を間違えたみたいで…」
「六本木っ！？」
僕が言い終わるより早く、女性が大きな声をあげた。
「そんな遠いところから来たの！？」
「ええっと…、どうやったら帰れますかね？」
もしかしたら想像よりも遠いところに来てしまったのかもしれない。僕は一日しか経っていないと思っているが、本当は二日以上経っている可能性だってある。そうなると、帰るのも一苦労しそうだ。
「バスを使えば駅まで行けるぞ」
僕の心配を他所に男が言ってきた。
「何処の駅ですか？」
「百合ヶ丘よ。小田急線の」
百合ヶ丘っ！
小田急線の百合ヶ丘の駅なら助かった。後は代々木上原か、新宿まで出てしまえばなんとか帰れそうだ。
「ありがとうございます！　次のバスは何時ですか？」
「もうないわ」
「え？…ない？」
「ええ、もう今日は来ないわ。駅までのバスは一日に一本きり。たぶんあなた、その一日一本のバスに乗って来たのよ、ここに。でないと六本木からここには来れないもの」
一日に一本しかバスが来ないところ。しかも最寄駅は小田急線の百合ヶ丘…。ここは一体何処なのだろうか。

「あ、明日も来るんですよね？バスは…？」
「一日に一本来る」
男はしかめっ面をしながらそう言い、再び葱坊主を摘み取る作業に戻った。
「あのさ、あなた…」
女性が男の背中と僕の顔を見比べながら話しかけてきた。
「帰ってどうするの？」
「え？」
帰ってどうする？
その言葉に僕の心臓は鷲掴みにされた。そして、六本木で朝まで付き合ってくれた同僚の言葉を思い出す。
「お前、仕事を辞めてどうするんだ？」
「…」
僕は同僚に言われた時と同じで、女性の言葉に何も答えられなかった。返事が無いのを女性はどう思ったのか、まるで僕の心の中を見透かしているかのように笑顔でこう言ってきた。
「もし何なら、ここで働かない？　大島さんの所でジャムを作ってみない？」
そう、あの時の同僚も同じように言ったのだ。
「仕事を辞めて、別れた彼女のためにジャムでも作るのか？」
と。

5

僕の送別会は六本木のお店で行われた。本当の所は最初に銀座でやっていたのが、六本木に移って二次会をしてくれたのだ。そしてお店を移る時に携帯電話の電池が切れてしまっていた。ＴｈｅＹｅｌｌｏｗＭｏｎｋｅｙのＪＡＭを一緒に歌った女の子とアドレスの交換をしようとして、電池が切れていてできなかったのだ。なんとなく、その時の女の子が見せたつまらなさそうな顔を覚えている。

僕は電源の入らない携帯電話を見ながら昨日の事を思い出していた。ジャム畑の男…大島さんに今日が何日なのかを確認し、六本木で飲んでいたのが昨日のことだったと分かった。二日も三日もどこかを彷徨った訳ではなかったようだ。

今は案内された大島さんの家の一室で休んでいる。先ほどの女性…伊東さんと大島さんの会話で出てきた、辞めたお手伝いさんが使っていた部屋らしい。

こうして部屋に案内されると、確かにここは不思議の国ではないのが分かる。部屋にあるものは簡素な物ばかりだったが、生活するには充分だった。ベッドにサイドテーブル、二人掛け用のクリーム色のソファにこれから夏になるにあわせて扇風機が置いてある。特にソファの座り心地は最高だった。土で汚れたスーツのまま腰掛けてしまった事を後悔しつつも、完全に体を預けてしまっている。本当は、クローゼットの中に入っている服は自由に使っていいと言われていたが、どうにも着替える気力が無かった。前任者は僕と同じ背丈の男だったようで、置いていった服や仕事着もそのまま着る事ができそうだった。

そう、僕はこの苺ジャム畑で働かせてもらう事にしたのだ。

伊東さんは大喜びで賛成してくれたが、大島さんはちょっと渋い顔をして、「帰らなくていいのか？」と聞いてくれた。

「別に誰も待ってませんし、ペットを飼っている訳でもないですから…」
「両親は？」
「実家、石川の金沢なんです。もう大人ですから特別な事がない限り、連絡なんてしてきませんよ。まぁ、元気だってことはたまに伝えた方がいいですけど」
そういえば、仕事を辞めたことも親には連絡していなかった。その上、アパートからも居なくなったら心配するだろう。そう思って携帯を取り出してみたが、残念な事に電源が入らない。もちろん、扇風機が動くのだ。ちゃんとこの部屋には電気が来ている。充電すればいいのだろうが、充電するための機械を僕は持ち合わせていなかった。
「別にすぐじゃなくてもいいぞ」
一度、帰って準備をしてからでもいいんじゃないか？　そう大島さんは言ってくれたが、なんとなく帰ってしまうともう二度とここには来られない気がして仕方がなかった。
大島さんが案内してくれたこの家も、今、彼が一生懸命ジャムのビンに蓋をつけている作業場も普通の場所だった。しかし、それでも僕にはまだ、不思議の国に迷い込んだ感覚が取れていないのだ。
ジャムのなる木…。
僕は明日から大島さんと一緒にその不思議な木の畑で働く事になる。
もちろん、ジャムの木の世話だけが仕事ではない。
先ほどまで彼がやっていたようにネギやソラマメなどの作物の世話や、ビンの蓋付けなどもある。どれも今まで自分がやってきた仕事は全く違う。ただ、不安よりもこの不思議な木と過ごすことができるワクワク感の方が大きかった。
「なんでまた畑仕事なんてやろうと思ったの？」
自分が提案してきた事を棚に上げて伊東さんは僕に聞いてきた。
「今日一日ここに泊まらせてもらって、明日帰ったっていいのに」

「勝手に畑に入り込んでおいて、その上泊めてもらうんじゃ悪いですよ。そうするにしたって何か御礼をしないと…。でも、今の自分にはもう体ぐらいしかありませんから…」
そんなのは言い訳に過ぎないと、たぶん伊東さんも分かっていただろう。でも、彼女はそれ以上は何も聞かなかった。ただ、「じゃぁ、頑張ってね」と言ってくれた。
本当は、現実逃避なんだと思う。
仕事に対する情熱も、やる気も、責任感もなくなってしまっていた僕は、このままじゃダメだと思い仕事を辞めた。この不景気に次の仕事が見つかる訳も無いのに、特に仕事になるようなスキルがある訳でも無いのに、僕は仕事を辞めたのだ。
行く当てがない。
そんな僕がたまたま迷い込んだこのジャム畑。
ジャムは今まで何度も作っている。オレンジにリンゴ、グレープにキュウイ。もちろん、苺を使ったジャムも作った。
しかし、ここは違う。
ジャムを育てるのだ。
「仕事を辞めて、別れた彼女のためにジャムでも作るのか？」
同僚の言った言葉を思い出して思わず笑ってしまう。
“作る”ではなく、“育てる”だったが、どうやら彼の言ったとおりになるらしい。もちろん、彼女のためにではない。
「じゃあ何のため？」
そう聞かれてしまえばなんとも答えられないが、とりあえず何かやることがあるのはうれしいことだと思う。
「僕が育てるジャムはどんな味なんだろう。甘いのか、すっぱいのか…」
僕はそう言いながら、電源の入らない携帯電話を鞄の奥の方にしまい込んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6167l/

苺ジャム畑

2010年10月8日14時38分発行